
うしなったもの、まもるべきもの

茶山びよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うしなつたもの、まもるべきもの

【Nコード】

N8956D

【作者名】

茶山ぴよ

【あらすじ】

14日更新しました みんなに追いつきたくて、焦って捨てた「はじめて」。気軽に始めたエンジヨ。『みんな陰でやってる』と思えば罪悪感も、あっけなく消えたはずなのに……。数年後、本当の幸せをつかみかけた亜莉紗に、忘れたはずの過去が突然襲いかかる。週2回程度の不定期連載中。

1 あたしは、人を殺した。――1（前書き）

この小説を中学生未満の方が読む場合は、保護者の許可を得て読むようにしてください。

中高生の方へ。

この小説は援助交際や興味本位の性行為を推奨するものではありません。

『将来出会う大切な誰かのために、自分を大事にしてほしい』
そんなメッセージをこめた小説です。

1 あたしは、人を殺した。 | 1

気がつくと、あたしはびしょぬれで突っ立っていた。

停止した思考。

胸が痛いほど苦しい息。

ドンッ、ドンッ、と体中を揺らすような血のリズム。

ほぼ同じリズムでゴンッ、ゴンッと激しく響くような頭蓋骨。

それにあわせるように、髪から裾から、水滴がぽたぽたと床に落ちていく。

なすすべもなく、突っ立っているけれど、

眼は黄色っぽい光景を、

耳は絶え間ない水音を、

捉えている。

黄色っぽい灯りに照らされたここは、ラブホテルのバスルーム。

絶え間ない水音は、目の前のバスタブのジャグジーの音。

大量の泡が、水面を騒がせているから「それ」はよく見えない。

あたしは無意識にジャグジーのスイッチをオフにした。

泡が止まって、静かになった水面の下に、「それ」　　いやさつき
まで藤本、という名前の男　　が沈んでいた。

と、男の視線を感じた気がした。

あたしの前がはだけていた。

ホテル備え付けの短い浴衣みたいな、帯でしめるへんてこな服。

下着も付けずにはおっていたその帯がほどけて、あたしは、ほとんど裸同然だった。

さつきの　　必死の格闘のせい。

さつき、無我夢中で　　あたしはこの男をジャグジーの泡の底に押し付けようとした。

最初からそうしようと思っていたわけではない。

ジャグジーに浸かったまま眠っているアイツを見たたん……気がついたら体が動いていた。

お湯の中に沈められた男は目を覚まし、抵抗しようと湯の中で暴れた。

ジャグジーの泡以上に湯が波立ち、あたしはびしょぬれになった。

力を抜いたら、最後。力を抜いたら、あたしの終わり。

『亜莉紗ちゃんが昔、何をしていたか、彼に教えちゃおうかな』

絶対にそんなことさせない。

ジャグジーの中で男の上に馬乗りになり、その顔を湯の上に出すまいとあたしは渾身の力を込めた。

泡にくぐもったうめき声が聞こえて ふっと男の体から力が抜けた。

ほんの5分前の出来事だ。

はだけていた前をあわせようとしたあたしだったが、そんな必要はないことに気づく。

眼も口もおっぴろげたまま、湯の底に沈んでいるけれど。

もう見えてないのだ。

その口からは泡ひとつ立てることはないのだ。

「バーカ」

あたしは水面の下にいる藤本につぶやいた。

声がうわずっているのがわかる。

あいかわらず、体中が震えるような動悸。

『バーカ』の『ー』の部分が情けなく震えてしまっている。

だけど、あたしは口に出さずにはいられなかった。

「あんたが悪いんだからね」

死体はもちろん返事をしない。

目を見開いたまま沈んでいるだけだ。

「仕方がなかったんだから」

そう、全部、こいつが悪いのだ。

やっとつかみかけた、あたしの幸せ。

『亜莉紗が22歳になったら、籍を入れよう』

そういつてくれた涼。

あと1か月なのに。

あと1か月で幸せになれるのに。

それを壊そうとするヤツは　こつするしかなかった。

あたしは、たつた今、人を殺した。

2 あたしは、人を殺した。 | 2

なんだか、臭い。

お湯が臭う気がして、あたしは藤本が沈んでいるバスタブの栓を引っ張った。

人は死んだら 垂れ流しになるっていうけど、もしかして、それ？

ううん。

そうじゃなくても、50歳をすぎたオヤジの藤本からは加齢臭みたいな独特の臭気がした。

さつき、4年ぶりに抱かれたとき。

それは、以前よりも強くなった気がして。

あたしは、以前よりもねちっこくなった行為そのものよりも、その汗が体に染み付くのが嫌でたまらなかった。

いや、藤本でなくても。

たとえば、いっさいの体臭のない男だったとしても。

嫌悪感はかわらないだろう。

もう、涼以外の男になど、絶対に抱かれなくなかったから。

涼だけのあたしでいたいから……。

バスタブのお湯はごうごうと音を立てて排水口へと流れて行き、藤本の裸体を丸見えにした。

本当に死んでいるんだろうか。

なんだか死んでる気がしない。

むくつと起きてきそうな気がする。

起きて、また言い出しそう。

『アリサちゃんが昔、何してたか、彼氏に教えちゃおうかな』

そう、1週間前。

突然現れたこいつは、確かにそう言った。

絶対に、それだけは困る。

絶対に涼にだけは、知られたくない。

その弱みにつけこんで、こいつはあたしをここに連れ込んだのだ。

『黙っててほしかったら、俺のいうとおりにしる』

あたしが昔、していたこと。

それは。

エンコー……援助交際をしていたこと。

3 あたしは、人を殺した。 | 3

あのかきは、本当に、軽い気持ちだった。

おしゃれな服。

新しい色のグロス。

ブランドの可愛いリュック。

欲しいものはいくらでもあるのに、お金がついていかなくて。

時給650円のファミレスのバイトに比べたら、『えっち』しただけで万札をもらえるのははるかに魅力的だった。

女子高校生。

一生で一番、女としての価値が高いとき。

それを無駄にするのはもったいない気がした。

「みんな陰でやってる」

そう自分に言い聞かせたら、『売春』という言葉も、罪悪感も、あ
っけなく消えた。

あ那时的相手の一人が、この死体。

藤本。

優しくてエッチなおじさん。

お金をいっぱいくれて、いい人だと思っていたのに
。

なんでこんなことになっちゃったんだろう。

あたしはバスタブの中の藤本に目をやる。

目があいたままだ。

当然、またたきもしない。

気持ち悪いけど、本当は触りたくもないけど、あたしはそのまぶた
だけ閉じてやった。

お湯に浸かっていたせいか、生きてるように温かい。

本当に死んでるのか疑わしい、だけど。

あたしが顔にふれたはずみで、口の端からお湯がこぼれた。

見ると仰向けに倒れた半開きの口の中には、お湯がそのまま溜まっていた。

藤本は半開きの口の中にお湯をためたまま、ごぼ、ともいわず横たわっていた。

生きている人間が、口の中に、こんなふうにお湯をためることなど、きつとない。

だから、やっぱり死んでいるのだ。

あたしは人殺しだ。

仕方がない。

こうするしかなかった。

こいつが悪い。

そうつぶやきながら、あたしは後悔していた。

それは 衝動的に、とはいえ、こいつを殺してしまったことじゃなくて。

あのころのこと。

『それヴィトンでしょ』
『いいなー、いいなー』

友達の声は、あたしを有頂天にさせた。

藤本は気前よくお金をくれて、いろいろなものを買ってくれた。

週1のセックスと引き換えに。

どうってことなかった。

割のいいバイトだと思っていた。

あんなことをして、自由になったつもりでいたあたしは　　。

本当になんてバカだったのだろう。

なんて軽はずみだったんだろう……。

あたしは、昔のあたしのせいで　　取り返しのつかないことをして
しまった……。

4 あたしの過去―1

いまから7年前。

高校生になって。

あたしはさっそく「初めてのこと」を2つ覚えた。

1つはアルバイト。

それは中学の時から決めていたことだった。

高校生になったら絶対にアルバイトをしたい。

それゆえに、校則でバイトが禁止されていない学校を選んで受験したほどだ。

なぜって あたしはお金を貯めたかった。

お金を貯めて、家を出たかった。

高校卒業と同時に、絶対に。

窮屈でしかたなかった祖母のマンション。

そのころ、あたしは祖母　　というよりババア　　と、とある地方
都市で二人暮らしだった。

中1の終わりに、たった一人のお母さんを事故で亡くして。

父は生まれた時からいないし、ひとりぼっちになったあたしは、お
葬式ではじめて会った唯一の親戚である祖母に仕方なく引き取られ
たのだ。

この祖母が　　戦前生まれの祖母は、とにかく口うるさくてケチだ
った。

あたしは生まれて初めて、門限というものを言い渡された。

中2で5時。

小学生かよ、とあたしは抗議したけど（いや、小学生だって、今の
コは塾で帰りが遅くなるはずだ）

「うちの方針だから。女の子は5時に帰って家事の手伝いをするも
のです」

と祖母は絶対に譲らなかった。

門限を皮切りに、制服のきこなし、見るテレビまで制限された。

私服も祖母がついてこないと買ってくれないから、好きな服はたい

てい却下。

それ以外にも、机の上の片づけ方から、箸のあげおろしに、あげく「うちはおじいさんの遺族年金でやっと暮らしてるんだから、無駄遣いするな」

と夜更かし厳禁、お風呂の時間や水道の使い方まで難癖つけられて使っていたピッチも

「中学生には必要ない！お金がもつたいない」
と取り上げられた。

なにもかもがんじがために縛りつけようとする祖母に納得できないあたしは、当然反抗した。

毎日のように繰り返される激しい口げんか。

「養ってやってるのに文句言つな！嫌なら出ていけ」

祖母は玄関に向かって指をさす。

一度は あたしはその通りに出て行こうとした。

まだ、転校してきたばかりで、そんなに仲がよくなったわけじゃない。
い。

だけど、頼めば誰かクラスメートが泊めてくれる。

そう思った。

だが、玄関に向かったあたしの背中に

「いいか、一度出て行ったら、二度と戻ろっなんて思っなよ」

鬼婆のような祖母の低い声。

英会話の友達、とやらと電話で話している声とは2オクターブも違うような声。

「二度と敷居はまたがせないからね。出て行ってとつと野たれ死ね」

足が止まったあたしに、ババアは

「さあ、どうした。さっさと出て行かんのか」

と追い討ちをかける。

悔しい。

まだ13歳、中2が社会に出れないことを、わかっいて。

祖母はあたしを徹底的に傷つけるのだ。

『野たれ死ね』

というのは祖母の決め台詞なのだ。

涙がこぼれてくる。

泣かされるのはいつもあたし。

悔しいよ。

あたしだって、こんなところ、出ていきたい。

出ていきたいよ。

でも、出て行っても行くところなんか、ない。

こんな田舎の町に中2の女の子が隠れるところなんかないんだ。

東京に帰りたい。

東京に……お母さんといったところに戻りたい。

あたしは布団をかぶって泣いた。

5 あたしの過去―2

考えてみたら、生きていたころ、お母さんは、ほとんど祖母のことを話さなかった。

いつ誰に聞いたんだか忘れたけど、地元の短大を出るなり、逃げるようにして家を出たというお母さん。

どうりで。お盆も、正月も、里帰りしなかったわけだ。

そんなお母さんの気持ちが、よくわかった。

お母さん。

お母さん、なんで死んじゃったの。

あの頃あたしは、祖母とケンカしては、声を押し殺して布団の中で泣いた。

あの頃あたしが泣いていたのは、お母さんが恋しくてではない。

恋しかったのはお母さん自身じゃなくて、お母さんといった東京の暮らしたった。

自由だったあの頃。

お母さんはあたしを特別可愛がったわけじゃない。

あたしが覚えているお母さんとはにかくいつも疲れていた。

たぶん、あたしを養うのに働くのでせいっぱいだっただんだと思う。

とはいえ、べたべたに可愛がられてはいなかったけれど、お母さんとの仲は悪くはなかった。

小さいころからあたしを自由にしてくれた。

もしかしたら教育、とかですら、気が回らなかったのかもしれない。

とにかく小学校の頃から、門限もなく、あたしは好きなように遊んでいた。

友達のうちに泊まって、夜通しゲームをしたり。

夏休みは友達と渋谷のセンター街をアイス片手にうろついたり。

服装についてもお母さんは無頓着で、

「あんたの夏の洋服代はこれだけだから。これ以上は出せないから」とお金だけポンとくれた。

たいした額ではなかったけど、自分でやりくりして好きな服をコーディネートするのは、楽しかった。

あたしは、自由なりに、ちゃんとわかっていた。

たった一人のお母さんに心配をかけたらいけない、ということ。

だから、遊ぶことは遊ぶけど。

警察につかまるようなことは、絶対にしない。

終電までには、うちか友達のうちに必ず帰る。

そんな一定のラインを自分の中に決めていた。

家の手伝いも、必要だったから、そのうち自発的にやるようになった。

洗濯機をまわしておいただけで、疲れて帰ってきたお母さんは

「わー、やっといてくれたんだ。ありがと、うれしー」

と笑ってぎゅっと抱きしめてくれた。

その茶色い髪のアたりからは煙草の匂いがしたけれど、あまり嫌じゃなかった。

コンビニで買うのに飽きたので、簡単ながら料理もやった。

学校で習った通りにやったつもりだったのに、初めての目玉焼きは少し焦げてしまった。

でもそんなのでも、

「食べれるから全然OK」

と喜んでくれた。

「最近は亜莉紗がいろいろやってくれるから、ホント助かるう。…
…彼氏とかできた？」

上機嫌で聞いてくるお母さんに

「いないよ、そんなの」

と答えたら

「そーなんだ。だったら、ずーっとウチにいてね」

って首をかしげてにつこりと甘い声を出した。

「なにソレ。もしかしてずっとお母さんの料理つくれってこと？」

「うふふ。そうだよーん」

「だーれが」……。

親子というより、友達同士みたいだったお母さんとの暮らし。

そんな会話が、お母さんとの最後の会話になってしまった。

中1の2月だった。

突然の、お母さんの死。

飲み会の帰りに、車にはねられてあっけなく死んだ、お母さん。

酔っぱらっていたんだろうか、なぜか道のド真ん中を歩いていたら
しい。

遊び好きだった、お母さんらしい死に方。

うちどころが悪かっただけの、寝ているみたいな、キレイな死に顔
だった。

死んでいる実感がわかなかった。

なんで、もっと気をつけて歩かなかったの。

お母さん。

なんで死んじゃったの。

あたし、もうやだ。

もう、こんな家、出ていきたい。

さもないと、あのクソババアを殺してしまいそう。

ホント、殺したい。

じゃないとあたしが死んでしまう。

いやだ。

いやだ。

いやだ。

いやだ。

派手な服をまとって夜遊びをしていた東京の頃より。

地味な格好をして規則正しい生活をしている今のほうが心は荒んでいた。

6 2つめの初めて――1

「家の血をひく娘が。なさけない」

なんでも祖母の実家は『いいうち』らしい。

祖母はそういう言葉をよく使う。

あたしが高校を選んだ時も、そうだった。

祖母が望むランクよりずっと低い高校だったから。

がんばればもつと上の学校に行けないわけではなかったけれど。

あたしにとって重要なのは進学率、とかよりも、校則でアルバイトが禁止されていない、ということ。

ただそれだけだった。

高校に入ったあたしは、社会勉強だから、と祖母をなんとか説き伏せてアルバイトを始めた。

（これも大変で、納得させるまで毎日毎日、すったもんだがあった）
でも、アルバイトに真面目に通うあたしを、見なおしたのだろうか。
それともさすがの祖母も60をすぎて、パワーダウンしたんだろう

か。

あいかわらず、友人宅へ泊るなどは、口うるさかったし、門限もあいかわらずで

「嫁入り前の娘は暗くなつてから出歩くもんじゃない」

などと時代遅れのことを言われていたが、バイトだからといえばしぶしぶ許してくれた。

意外なのはあんなにケチなのに、アルバイトのお金は

「それはお前が稼いだお金だ。よく考えて自由に使いなさい」

といつてくれた。

あたしがバイトを始めたのは、国道沿いにあるファミレスだった。

時給は研修中は630円だったけれど、働いてお金をもらえるといるのはとても新鮮な体験だった。

お金をもらえる、と思えば、

皿の3枚持ちも、

オーダーとりのマニュアルも、

百種類もあるメニューの略も、

教科書よりはずっとラクに覚えられる気がした。

祖母、といえは一度、アルバイト先に挨拶にきたことがある。

「ちゃんと、店の人に迷惑かけとらんやろうね」

と声をかけられて、他のバイトの子の手前、あたしはとても恥ずかしかった。

店長も

「いちいち親御さんがあいさつに来たのは初めてだ」

と驚いていたほどだったけれど、祖母にはあたしのまじめな勤務態度を終始褒めてくれた。

若いのに、きちんとしている。

遅刻欠勤が一度もない。

飲み込みが早くて頼もしい。

そんな言葉を聞いて、祖母はすっかりアルバイトを信用してくれたらしい。

あたしは、グッジョブ、店長。と心の中で親指を立てた。

そして1か月働いて。

初めて給料をもらったとき、あたしは、何でもできる力を手にしたような気がした。

希望がはつきりと目の前に降りてきた気がした。

あの窮屈な祖母の家を、出ることができる可能性。

あたしは、ますますバイトにせいをだした。

週に4日ほど入れば、5万くらいになった。

そのうち2万ずつは貯金するんだ、と心に決めた。

3年後には一人暮らしを始める軍資金になるはずだったけれど。

そう簡単にはいかなかった。

それと。

あたしはバイト先で、出会ってしまった。

あたしに、もう1つの「初めてのこと」を教えた、アイツ ヒロキと。

7 2つめの初めて―2（前書き）

今回の話は、いったん現在に戻っています。
亜莉紗はホテルで……。

7 2つめの初めて―2

これから、どうしよう。

そう考える前に。

あたしは、まずシャワーをあびたかった。

さっき、藤本に舐めまわされた……唾液がついたままの体を洗い流したい。

バスタブの中での、藤本との格闘のせいで、すでに体中びしょびしょに濡れていたけれど。

藤本に汚された汚点は、粘りついているように思えたのだ。

このとき、すでに。

自首する、という考えはまるで浮かばなかった……。

人を殺した、ということはわかっている。

だけど、それは直接的な罪悪感に結び付かなかった。

まるで、心のどこかで、当然と考えているように。

だからといって。

逃げよう、とか。

この遺体を隠さなくては。

などという具体的なことが浮かんだわけでもない。

とにかく、体を洗い清めたかった。

ガラス張りのシャワールームは、ジャグジーの横にある。

なぜか一段高くなっているシャワールームの中からは、バスタブの中の藤本がよく見えて。

あたしは、いったんシャワールームを出ると、洗面台からバスタブをもってきた。

そしてもう一度バスタブの横に立つ。

全裸の だらしなく眠っているような 死体。

それが気味悪くて。

あたしはバスタオルを広げると、遺体の上にかけた。

大きなバスタオルだけど、ひざ下がはみ出る。

もう少し。もう少し引っ張れる。

あたしは手をのばして、少しでも遺体の多くの面積を隠そうとした。

そのとき。

……あ。

体の中から、液体が逆流するのがわかった。

藤本が残した、液体。

『同棲してるなら、ピル飲んでるんだろ』

そついつて、強引に体内にぶちまけたもの。

いやだ。

気持ち悪い。

あたしは、あわててシャワーブースに駆け込むと、コックをひねった。

激しい雨のように、あたしを包むシャワー。

温かい雨。

そして思い出す。

はじめての男。

生ぬるい雨の中のキス。

この体内から逆流する感覚も。

あたしに、ぜんぶ教えた……ヒロキ。

『ごめん、ごめん』

無責任なヒロキ。

つけないほうが気持ちいいから、外で絶対に出すからと、いつて。

『それ』に失敗すると笑って、キスしてごまかした。

そうすると、たいしたことではないように思えた。

バカだった、あたし。

涼は、といえば。

絶対に避妊してくれた。

責任を取りたくないから、とかじゃない。

あたしのことと、二人の未来を真剣に考えてくれたから。

あたしは思う。

はじめての男が、本当に好きな相手で。

お互いに大事に思えるような……そう、涼のような人なら。

ううん。

涼と出会うまで「はじめて」を取っておけば。

こんなことにはならなかった。きっと……。

8 はじまりは、雨「1（前書き）」

今回から、亜莉紗の「はじめて」についての思い出が再び語られます。

8 はじまりは、雨 1

あれは、バイトにも慣れはじめた梅雨のはじめ、だったと思う。

もつとつに褪せてしまった、ヒロキに関する記憶。

「うそー。40%のくせになんで降るかな」

あがる30分前から急に降りだした雨。

ガラス張りの窓からは雨に濡れた路面がてかっていて、あたしはがつくりと肩を落とした。

どつりでお客さんが少ないわけだ。

傘はスタッフルームの置き傘を借りればいいけど。

あいにくあたしはチャリだった。

高校から直接ここにくるにはチャリが一番便利だったから。

店内に流れる音楽に負けじと響く雨音から、雨は結構強く降っているらしい。

傘差してチャリこいだら、たぶんびしょぬれになってしまうだろう。

そこまでして、窮屈な祖母の家に、わざわざ早く帰るよりも。

雨を口実にして、遅く帰ったほうがいい、とあたしは判断した。

店から歩いて5分のバス停から9時50分のバスがある。

帰りが10時をすぎるのに、もちろん祖母はいい顔をしなかったが、その時間しかバスがないのだから仕方がない。

それにバイト先のファミレスには同じくらいの年の高校生やフリーターが結構働いていて。

同じ時間であがるコや、休憩に入ったコたちとしゃべってれば、楽しいし時間はすぐに経つだろう。

「お疲れさまでーす」

「アリサちゃん、あがり？」

裏への扉の隣にあるアイスクリームのコーナーにいた雪菜さんが声をかけてきた。

パフェをつくっているらしい。

ちなみにこのレストランで一番年下のあたしは、1か月もするとみんなに「アリサちゃん」と呼ばれるようになっていた。

あたしのことを『大友さん』と苗字で呼ぶのは店長と料理長くらいだった。

「はい。あれ、雪菜さん、9時から一番じゃなかったっすか？」

一番、というのは休憩の店内用語だ。

「ああ、これ。これはあたしの『従食』」

ハスキーな声でそう答えると、雪菜さんはニツと笑った。

このファミレスは、値段の40%を払えば（給料から引かれる）何を食べてもいいことになっている。

スイーツに目がない雪菜さんは『従食』として自分が食べるチョコナッツサンデーをつくっているのだ。

お客に出すもの以上に、ぎゅうぎゅうと力をこめてディッシャーにアイスを詰め込んでいる。

お金がもつたいないので、あんまり従食を利用することのないあたしだったが、雪菜さんの『従食』を見てると急激に甘いものが欲しくなってきた。

「あたしも食べて帰ろうかなあ。いいな、チョコナッツサンデー」

「じゃ、あたしがついでに作っただけよ」

「いいんですかあ？」

「まかしとき。スペシャルバージョンやけん」

雪菜さんは黒いアイラインで縁取った目でいたずらっぽく笑った。

しばらくして雪菜さんがスタッフフルームに持ってきたチョコナッツサンデーは、一見ちょっと多めに生クリームがかかっているだけだったが、

「実は、アイスは全部16番じゃなくて18番つかってるんだ。それとこのアイス、バニラじゃなくてティラミスだし。こっちのほうは、ゼツテエうめえし」

と雪菜さんは得意げにささやいた。

ちなみに16番とか18番というのはディッシャーの大きさで、当然18番のほうが大きい。

「本当だ。すっげウマイ」

「だろー」

アップにした明るい色の髪といい、濃い化粧といい、どうみても筋金入りのヤンキーな雪菜さんだが、とても親切だった。

雪菜さん以外の店の人も、キッチンのおじさんたちまでだいたい親切で、スタッフはみんな仲良しだった。

こうやって裏でパフェをばくついていると、

「アリサちゃん、あがり？」

「そんな極甘、よく飽きないねー」

裏のスタッフルームは倉庫の隣にあるから、何かをとりに来たスタッフがよく声をかけてくる。

「また18番サンデーかぁー？ 店長がいないとめちゃくちゃやるな」

ヒロキ そのときはまだ山上さんと呼んでいたんだけど もそんな感じで笑いながら声をかけてきた。

彼はあたしや雪菜さんとおなじホール担当だ。

どうやらきれた紙タオルを補充しにきたらしい。

「べつつにーじゃん。コースターなしだしさ」

従食用なので、飾りのコースターや受け皿をつけてない分、アイスを増やしたと雪菜さんはめちゃくちゃ言い訳をした。

ひとくち、と雪菜さんに向かって口をあけたところを見ると、まあ、山上さんもとがめるつもりはないみたいだ。

「やだよー」

「口止め料、口止め料」

とうとう雪菜さんは「しょーがねーなー」と、さもいやそうにティラミス部分をすくって差し出した。

それをパクつとうまそうに口でキャッチした山上さんを……あたしは、何かいけないものを見たような気がして仕方がなかった。

雪菜さんは、たとえば、山上さんの口の中に入ったスプーンを、まるで気にすることなく平気で自分の口に運んでいる。

ちなみに雪菜さんには、同棲している彼氏が、ちゃんという。

つまり、彼氏でもない、単なるバイト仲間と間接キス。

でも、そんなことを気にする自分が、逆に一番いやらしいような気もして。

いたたまれなくなったあたしに、山上さんは優しい声をかけてきた。

「あれ？ アリサちゃんはあがりじゃないの？」

「……バス待ちです」

「あー、急に雨降ってきたからね。何時のバス？」

「50分です」

いちおう敬語を使うのは、山上さんが4学年上の大学2年生だからだ。

山上さんに話しかけられるとき、あたしはいつも微妙に緊張している。

だって、あたしの人生で、4歳年上の人と話す機会などなかったから。

あたしはそんなふうに自分に言い訳していた。

でも、キッチンのおじさんたちとはそんなに緊張などしないのだけど。

「ふーん。……10時まで待てるなら送ってってあげるよ」

「何、ヒロキ、今日さっそく新車乗ってきたんだ」

ヤンキーの雪菜さんにかかれば、年上でもヒロキと呼び捨てだ。

「そだよ。なのに雨降っちゃってムカつくけど」

ムカつく、といいつつ山上さんは嬉しそうだった。

そういえば、自宅から大学に通ってる山上さんは、バイト代を新車の頭金にするために貯めてるっていつてたっけ。

「バスだと××線まわりでしょ。車のほうが早いよ。ね」

山上さんはあたしの顔をのぞきこんだ。

「はあ」

「いっじゃん。送ってもらえばさ。バス代得するし」

雪菜さんもそういうので、なしくずしにあたしは送ってもらうこと

になつてしまつた。

9 はじまりは、雨」2

「バイト、慣れた？　たちっぱできつくはない？」

「ハイ、大丈夫です」

やっぱり緊張する。

だって。男の人と車で二人きり、なんて初めてだから。

そもそも母子家庭だったあたしにとって、知り合いに車に乗せてもらうこと自体がとても珍しい。

小学校の頃に、友達と一緒にイチゴ狩りに連れて行ってもらったくらいかもしれない。

あの頃に比べて、大きくなったあたし。

しかも、後部座席だった子供のころと違って、助手席だ。

助手席って。

すごく、大人な感じがする。

大人の、一人前の女性の……女扱いされてしかるべき席。

あたしが座つてもいいんだろうか、そんなためらいさえあって。

それに。

あたしの制服の短くしたスカートは。

助手席のシートにちゃんと座ると、太ももがかなり丸見えになる。

学校のバッグを後ろに置いたことをあたしは後悔した。

たえず気になるスカートの裾も。

フロントガラス越しの街灯だけの、暗さも。

胸を斜めに締め付けるようなシートベルトも。

ガソリンなのか、ビールなのか、苦い匂いがする湿った空気も。

なにもかも慣れない車の中は、とても窮屈に感じた。

雨はあいかわらずひどくて。

ワイパーは休むことなく左右に動いているのに、そのそばから雨が夜の景色をぼやかしてしまふ。

そんなふうに出の景色がかすむと、あたしはますます、この車の中が息苦しくなる。

逃げられない密室に……二人きり。

「××女子高だよね」

「はい」

あたしの緊張を知ってるのか知らないのか、山上さんはハンドルをとったまま何気ない話をふってくる。

そんな風に車を運転する山上さんの横顔は、とてつもなく大人に見える。

「俺のサークルの後輩に××女子高出身の子がいる。……っていうんだけど知ってる？」

あたしは首を振った。

高1のあたしが、卒業生を知るはずがない。

「そっか。知ってるわけないよね」

車の中は、それっきり沈黙した。

信号で止まっている車内には、ワイパーの音だけがひびいて。

あたしは、あせる。

でも、どうしていいかわからないので黙っているしかない。

「アリサちゃんさ、ヒロキに狙われてるよね」

さつき。

山上さんがいつてしまったあとで、雪菜さんはこんなことをいった。

「そうですかー？」

あたしは、とつさに気付いてないふりをしたけど。

「アリサちゃんにばっか優しくするじゃん」

雪菜さんのいうとおり、山上さんはあたしに優しくかった。

彼は私が入店した時から、

『新しく入ったひと？ えっ、高一？ おとなっぱいね』

と親しげに声をかけてきて、何かと親切にしてくれた。

バイト先にはあたしのほかにも高校生や短大生の女の子が働いていたけれど、彼は最初から目に見えてあたしに親切だったと思う。

団体さんのオーダーが入ったらさりげなくヘルプしてくれたり、忙しくてバッシング（片付け）の手がまわらないときなんかは、さつと片づけてくれたり。

「まだ新人だから、危なっかしいんじゃないスカ」

と理由をつけつつも、あたしも、とつくにわかっている。

『高校どこ？』

『中学は？』

『なんでバイト始めたの？』

暇なときは、どうでもいいことを何かとよく話しかけてきたし。

たぶん『狙われている』のはわかる。

でも、だからといって。

意識するだけで、どうふるまえばいいか、わからなくて。

彼に話しかけられるたびに、あたしはなんとなく緊張していた。

こないだまで中学生だったあたしから見れば、19歳の男の人はすごく大人で。

「ヒロキ、年下好みだもん。前の彼女も年下だったし」

「そーなんだ」

前の彼女、という単語に、あたしはひっかかりを感じる。

どんなコだったんだろう。

それは最近のことなのかな。

湧いてくる興味を『関係ない』と胸の奥に押し付けながら、あたしは雪菜さんが前の彼女について、もっと詳しく話すのを待った。

だけど、

「ぜってー狙われてるって」

雪菜さんはそれしか言わなかった。

あたしから聞いて、山上さんに興味があるように思われるのもイヤだったから、それきりになる。

「アイツ、見た目によらずやりちんだから気をつけりーね」

とだけ言って、雪菜さんは1番を終わって仕事に戻ってしまった。

「この車にさ」

何回目かの信号停車で。

「女の子乗せるの、アリサちゃんが初めてだよ」

ふいに、山上さんは柔らかい口調で話しはじめた。

あたしはハッと顔をあげた。

優しい目でみつめられていた。

心臓が、暴れだす。

シートを通じて、山上さんに伝わってしまうのではないかというほど、激しく。

「えー……。ウソばっか」

あせるあたしは、なぜかそんな答えをしてしまった。

「え、なんで」

外の白い街灯に、半分だけ照らし出された山上さんの顔は思ったより真剣で。

雪菜さんとの時のように、「冗談で受け流してほしかった部分。

あたしはどうしていいかわからなくなってしまった。

あんなことをいつてしまった理由。それは。

「やりちん」

という単語がずっと気になっていた。

それは彼にはとても似合わない単語だった。

だって。

山上さんのルックスは、『イケメン』というよりはどっちかという
と『いい人』な感じだった。

スラッとして背がまずまず高いスタイルはイケてるけど、顔たちは
地味だった。

笑うと目が糸になる。

そんな、キッチンのパートのおばちゃんにもかわいがられている彼
が『やりちん』とは、どうみても信じられない。

そこがあたしの認識不足だったんだけど。

あたしのなかでは『やりちん』な人＝イケメン＝派手なルックス、
という構図があったのだ。

人の良さそうなおばちゃん受けもいいヒロキが『やりちん』とは

どうしても信じられない反面。

大学生、という今まで出会ったことのない人種が、どんな暮らしをしているのかも、またあたしには想像のつかない世界だった。

どう処理していいかわからない沈黙。

信号が青に変わって、とりえずエンジンが動き始める。

「まーた、雪菜がよけいなことを吹き込んだんだろ、まったく」

ハンドルをとりながら、山上さんはやっと明るい声を出してくれた。

「あいつ、面白半分にウソばかり言うもんなー」

しょーもない、というような口ぶりに続けて。

「この車は」

とあらたまった口調で振り返る。

「先週納車したばかりだから。本当に亜莉紗ちゃんが初めてだよ」

あたしは、また、なんて答えたらいいかわからなくなってしまった。

10 はじまりは、雨」3

「この車は、先週納車したばかりだから。本当に亜莉紗ちゃんが初めてだよ」

その言葉がどんな意図を持つのか、何をあたしに伝えたいのかわからなすぎて。

あたしは山上さんに何て答えたらいいかわからなくて、本当に困った。

『ありがとうございます』

というべきなのか。それとも

『嬉しい』

とはしゃぐべきなのか。

わからない。

仕方なく

「先週、買ったばかりなんですか？」

と訊き返す。

「そ。ずっと自分の車が欲しくてさあ。それで頭金貯めてたんだ」
そっすえば。

車のためにバイトして、ってのは前に誰かと話してるのを聞いた気がする。

スタッフルームで車情報誌とかカタログを広げて男同士話がはずんでたところも、たしかに見たことがある。

なんでも、自宅から大学までバスを使うと1時間もかかるうえにあまり本数もなく、不便だったらしい。

車ならたった30分で通学できる。

今まではお父さんのセドリックやお母さんの軽を使わない時に借りてたけど、これからは自分の車で通学できるのが何よりうれしい、と山上さんはハンドルをとったまま説明を続けた。

それで、あたしは山上さんのいつてる大学がだいたいわかった。

おそらく郊外にあるあまりレベルが高くない私大だろう。

ファミレスなんかでバイトしている時点で、たぶん国立大のほうではないな、とは思っていた。

なぜなら国立大学なら、フツーは家庭教師や塾講師などの、もうち

よつと割のいいバイトを選ぶだろうから。

あたしがそんなことを考えているとは知らず、山上さんはこの車を選んだ理由なんかを、前を見たまま、しゃべっている。

思い切って新車を買ったのがとても自慢らしい。

その嬉しさは、はずんだ声からも十分にわかる。

「どうりで、すごいキレイですね。あちこちピカピカ」

車にはまったく詳しくないので、気の利いたほめ言葉が浮かばない。あたしは、とりあえず「新品のキレイさ」をほめるしかない。

「だろー？ あんまりキレイだから最初、車内土足禁止にするか迷ったんだ。でもいかにもセコいからやめたんだけど」

そういわれて、あたしは、足もとをみた。

雨だったから、あたしの靴からついた水分で新品のマットがびしょびしょになっている。

あたしと山上さんが店から出てきたとき、雨は最高に激しかったのだ。

「……すみません」

反射的に謝ったあたしに、山上さんはなんのことだかわからなかったらしい。

「ん？」

と振り返った。

「床、びしゃびしゃにしちゃいました」

そういつてようやく、「ああ」とうなづいた。

「いいって、いいって。そういうので気を使わせたくないから土足OKにしたんだし」

山上さんは目を糸にしながら、まったく気にしてない風に、話を続ける。

「大学のダチにさ。やっぱり新車買ったやつがいるんだけど、買って半年経つのに、シートにビニールはりっぱなしなの」

「ビニール？」

「そう。汚れるのが嫌なんだって。ビニールがやぶけるまでとりあえずつけとく、っていうんだけど、半年経ってもまだついてんだぜ。おかしくない？」

「へえー」

と返事をしながら、あたしは話ではなく別のことに気を取られていた。

さっきから気になっているそれは、山上さんの声。

ホールの中での

「いらっしやいませ」

「かしこまりました」

「ごゆっくりどうぞ」

という営業用の、柔らかく明るすぎる声より一段低くて。

くだけた口調に、車の中で聞くせいなのか、男っぽく響く。

男の人の声って。

こんなに胸に響くような声だったっけ……。

山上さんの意外な魅力に、再び気になることが浮上してきた。

「やりちん」疑惑。

この声で、甘いことを囁かれたら。

案外、彼は女の子の前では、変身するのかもしれない。

そんなこともありえるかも。

彼の可能性があがるにつれて、汚してしまったマットも、気になります。

「女の子乗せるの、アリサちゃんが初めて」

そういつてたけど、あたしでよかつたんだろうか。

それとも　あたしをわざわざ選んだんだろうか。

焦れるつま先。

革のローファーからしみ込んだ雨は、靴下にまで染み込んでじつと
りと冷たい。

靴を動かすと、ゴムのマットの上で、泥がざらついた。

「いいって」といつてくれたけど、なんだか申し訳ない。

それとも、山上さんにとっては、マットやビニールのように。

「初めて乗せる女の子」も、どうでもいいことなんだろうか。

さつきより動悸が落ち着くとともに、ずっと気になっている。

「ところでさ」

「あたしなんかで」

声を出したのは二人同時だった。

「あ……」

目が合う。

恥ずかしい。

ひっこんでしまったセリフのかわりに、顔に血がのぼってくる。

再び目が糸になった山上さんをあたしは見続けられず、視線は自分の太ももに墜落した。

「いいよ」

山上さんは譲ってくれるそぶりをしたけど。

顔が熱い。

話せるわけない。

『あたしなんかで、よかったの?』

なんて……。

あたしは下をむいたまま首をぶんぶん振って、

「いや、いいです」

とかろうじて答えた。

「せっかくだから、少し、ドライブする？」

雨音より。

小さく響くラジオの音より。

山上さんの柔らかい声が、あたりを支配してしまっていた。

11 『初めて』の重み

「せっかくだから、少し、ドライブする？」

あたしは反射的に首を横に振ってしまい……山上さんの顔を見て後悔した。

こんな、がっかりしたような顔、はじめて見たかもしれない。

即座に断ったから、傷つけてしまったのかもしれない。

「そ、祖母がうるさいんです……。すみません」

あたしは、なんとかフォローをいれる。

「ふーん」

だけど、言い訳に聞こえてるかもしれない、とあたしはさらに言葉を重ねる。

「本当に厳しいんです。高校生になっても門限6時とかだし」

「6時イ！」

やっと山上さんは本気で驚いてくれた。

「はい」

「バイトのときなんか、軽く超えるじゃん」

「はい。バイトは特別に許してもらってるんです」

……あ、なんかウソくさいかも。

でも本当の話だから仕方ない。

バイトじゃないときに門限を破ると、罰として1回につきこづかいを1000円ずつ引かれる。

ちなみに、こづかいは洋服代は別として5000円。

バイトをしているとはいえ、ただでさえ少ないこづかいが1回1000円ずつ減るのは、本当に死活問題だ。

必死でそんなことを説明するあたしは。

やっぱり山上さんとドライブにいきたいんだろうか。

山上さんに嫌われたくないんだろうか。

心の中で自問自答を繰り返している。

「……そっか、大変だね」

山上さんは、あいかわらず落ち着いた柔らかない声で答えてくる。

「じゃあ、今日はまっすぐ帰らないとね」

「……スイマセン」

それっきり、車の中は沈黙して……雨音が再び冷たく暗がり支配しだした。

「ええー。なんで、そのままドライブしなかったの？」

ハルナが高い声をあげたのであたしはシーと左手の指をたてた。

学校の昼休み。

いつものようにハルナとお弁当を広げている。

昨夜の雨と打って変わって、初夏の太陽がまぶしい今日。

教室の窓を開け放つても少し暑いくらいだった。

「こづかい１０００円引きくらい何さー。『捨てる』チャンスだったのに」

「声大きいよ」

あたしはあたりを見渡した。

女子高の昼休みの教室は騒がしくて。

そのおかげか、何気ない、だけど、きわどい意味を聞き取った人はいないみたいだった。

「あゝあ。もったいなーいいい」

少し声を落してハルナは、あたしのお弁当から卵焼きをすばやく奪い取った。

あたしは昨日のおかずにお焼きを加えただけのお弁当をいつも持ってきている。

女子高であるうちの学校には学食がない。

パンなどを買えばそれはこづかいから出ていくことになるから、あたしは毎朝せつせとお弁当をつくることになった。

あたしの卵焼きは、祖母に厳しく仕込まれたせい、ハルナにとっても好評で。

油断しているといつもとられてしまう。

「アリサはいいお嫁さんになれるね。いつそ処女も未来の旦那さんのためにとつとけば」

あーおいしい、といいながら時折そんな冗談をいう。

当時のあたしは、とんでもない、と思っていた。

ハルナは、高校に入っでできた友達だった。

中学時代、あたしは途中から転校してきたせいか、あんまり親しい友達はできなかった。

それに、転校してきて1週間くらいで、怖いセンパイに呼び出しくらって。

派手なグループと遊びまわっていた東京時代のニオイを嗅ぎつけられたのかもしれない。

幸い、センパイにはちよつと注意されたくらいで済んだんだけど、それがうわさになって怖がられていたらしい。

言葉づかいも、気取ってるとか陰口をたたかれているのもわかっていた。

門限が厳しすぎるのも、あまり溶け込めなかった原因の1つだと思う。

だから、高校では友達をつくりたい、と思っていた　そんな入学

式の日。

靴箱にいたあたしに、小柄で愛嬌のあるコが近寄ってきた。

「1組の大友亜莉紗さん？」

そのコはいきなり話しかけてきた。

なんでフルネームを？

と、びつくりしてうなづくと

「あたしも1組。小田春菜っていいます。よろしく」

とあたしの靴箱の隣に手を伸ばしてきた。

それで理解した。

張り出されたクラス発表で、出席番号が前後だったから、名前を覚えていたらしい。

それがきっかけで、春菜とはすぐに仲良くなった。

中学時代のことがあったから、女ばかりの女子高で、うまくやっていけるか少し心配だったけど。

社交的な春菜とつるんでいたおかげで、高校ではみんなと普通に仲良くなることができたのだ。

女ばかり40人もいるクラスにはそれこそいろいろなタイプのコ

がいた。

少数民族もいたけれど、だいたいはギャルっぽい遊んでる感じの
か、オタク、スポーツ系の3つのタイプに大きくわかれるみたいだ
った。

アニメもみないし、部活もやらないあたしは、ギャルグループのコ
と固まることが多かった。

そこで、あたしは知る。

仲良くなった友達のうち、半分以上がすでに処女ではないことを。

12 焦り

中2のはじめ。東京から転校してきたとき。

祖母が口うるさかったとはいっても、あたしはこの地方都市のコたちより進んでいたと思う。

ファッションも、持っている小物も、そして男の子との関係も。

お母さんには照れくさくて言わなかったけれど、東京にいたころ、彼氏といえる男の子はいた。

同じ学年で、遊び友達だった彼とは、キスまでだった。

早熟な彼はもつと先まで進みたがったけれど、あたしは許さなかった。

遅生まれのあたしは中1当時まだ12歳で、さすがに早すぎる、と自制していたのだ。

倫理的な理由だけでなく、実際やせっぽちだったあたしの体は胸もまだぺったんこで、そんなことをできるとも思わなかったのだ。

こっそりと交わす柔らかい唇の感触だけでも、十分大人な気がした。

だけど。

こっちに来てから、わずか2年のあいだに、まわりはあたしを追い越して行ったらしい。

あの厳しい祖母の元で暮らしていたら、彼氏なんてできるはずがない。

ほとんど家と学校を往復するだけだった中学時代。

ハルナと特に仲良くなったのは……彼女も同じだったから、という
ものもある。

ヤンキーが多い地元公立中を避けて、私立の女子中に入ってたというハルナは、本人こそ言わないけれど、結構いいうちのお嬢様だと思っ
思う。

女子中だから彼氏もつくれなくて『暗い青春だった』とぼやくハ
ルナは、あたしと同じく処女だ。

『エスカレーターの子高になんかぜったいに行かない！……と思
って、わざわざ共学の公立高校を受験したのに、落っこちちゃった』
と明るく打ち明けた。

おしゃれで可愛いし、性格も悪くないからすぐに彼氏くらいできそ
うなのに、男の子の前に出ると構えてしまっらしい。

『これも女子中の後遺症だよ。きょうだいも妹だけだし』

と頭を抱えるが、男っけのない中学後半をすごしたあたしもいつの
まにか、後遺症になっっているんだろうか。

東京にいたころは、もっと男子とも気軽に話せたのに、その時代からみると、昨日のあたしはあきらかに緊張しすぎだ。

「今度誘われたときは、絶対にいきなよ」

ハルナは念を押すと、ジュースのストローを吸った。

「バイトで彼と一緒にいる日は新しいパンツはいていかなくちゃ」

ときわどいことまでいうから可笑的い。

経験もないくせにハルナはときどき突っ走ったことをいうのだ。

「てゆかー。あっちもそういうつもりか、まだわかんないし。……それに、正直なところ、あたしも山上さんのこと好きかどうかかわかんないし」

「なにその消極的な考え。しり込みしたら、いつまで経っても処女のまんまだよ」

説教するやり手ババアみたいな口調になってるハルナがおかしくてあたしはつい笑ってしまった。

「そこ、笑うところじゃないし」

ハルナは唇を一瞬とがらせたあと、声をひそめて

「付き合ってみたら、それから好きになるかもしれないじゃん。…
…でさあ、やったらどうだったか、教えてね」

とささやくことは忘れない。

そうだ。

まだのあたしたちは、参考にするべきリアルな経験談に飢えていた。
すでに処女ではないコたちは、むしろえっちなことについてあまり
具体的にはしゃべらない。

処女のコのほうが積極的にえっちなことについての詳細を聞きたがるが、
それについて

「それは……ねえ？」

「だよね」

と非処女どうし目配せをしてごまかす。そして

「してみればわかるから」

「そうぞ。すればわかる」

と言ってほほ笑む。

そんな様子は、すごく大人に見えて。

なんだか焦った。

放課後。

あたしは、ハルナとわかれてバス停にいた。

今日はバイトではないけれど、昨日の雨のせいでバイト先に自転車を置いて帰ってしまった。

自転車がないと明日困るだろうから、あたしは今日のうちに取りに行こうと思ったのだ。

本数が少ないので、あたしはぼんやりバスを待っていた。

と、横を自転車が2台、並んで通り過ぎた。

同じブレザーを着た、あたしと同じ年くらいの男の子と女の子。

近くにある共学のコたちだろうか。

自転車を並べて笑いながらしゃべりあっている。

たぶん、カップル。

いいな。

あたしは、バスを待つふりをして彼らの背中を見送っていた。

あたしの頭の中にある、理想の付き合い。

同じ高校生で。

自転車を並べて帰る放課後。

少しずつわかりあうのと比例して、自然に少しずつ進んでいく関係。早く処女を捨てたいと思いつつ、そんな爽やかな関係にもあこがれていた。

それに比べると、大学生で車にまで乗ってる山上さんは、恋の相手としては少し大人すぎる気がした。

山上さんは、あたしの知らないことをいっぱい知っている……女の人のことも、きっと。

そう考えると、少し怖くて。

ハルナに話した通り、あたしは山上さんのことが好きなのか、自分でよくわからなかった。

あんなにドキドキしたくせに、だ。

『狙われている』という事実に関が過剰反応したのかも、と冷静に考えたりもするくせに、昨日の夜のことを考えると甘酸っぱいもので胸のあたりがきゅんとする。

もちろん。

彼氏はほしい。

できれば、早く経験もしたい。

そんな焦りはあった。たぶん人一倍強く。

なぜなら、祖母はあたしによく言う。^{ババア}

『嫁入り前の娘が外泊なんて。とんでもない』

「嫁入り前」と祖母が言うのは、たぶん「処女」という意味。

祖母はあたしが処女だと信じている。

それをこっそり捨てて大人になることは……祖母の呪縛から解放されることでもあるように思えたのだ。

『付き合ってみたら、それから好きになるかもしれないじゃん』

ハルナの声が蘇る。

付き合ってみるのもテだろうとは思う。

実際、あたしは好きかどうかわからないけど……山上さんが決して嫌いではない。

目が細くて、笑うとスヌーピーみたいな印象になる山上さんをいい人だと思う。

きのうはすごくドキドキしたし。

誰でもいい。

あたしを祖母から解放してくれるなら。

できれば、そのまま連れて逃げてほしい、とさえ思うあたしの頭の中には、夜の駅の情景が広がっていた。

どこかのドラマで見たのだろうか。

手と手を取りあって、逃げる二人。

ロマンチックな想像に入り込んだあたしは、近づいてくるバスの姿に我に帰る。

山上さんは。

これから、人生のすべてを賭けるほどの人になるんだろうか。

あたしは、バスの車窓から見える、金色に輝く午後の街に彼の面影を描こうと努力した。

彼が好きなのか。

それとも……。

いずれにしても、次の誘いを、あたしがひそかに待っていたのも事実だった。

だけど。

梅雨が本格化したのに。

山上さんは、あれ以来、

「送っていいこうか」

といってくれなかった。

13 気になって

あれから。

梅雨が本格化し、何度も雨の日はあったのに。

山上さんは「送って行こうか」といつてくれなかった。

辞めた人のかわりに、山上さんが深夜のシフトに入るようになったから、という物理的な理由もある。

だけど、あたしと入れ替わりで出勤する山上さんは、

「お疲れ様です」

と挨拶はしてくれるものの、前みたいにいろいろ話しかけてこない。

あたし、嫌われちゃったのかな。

好きかどうかわからない、なんて言っただくせに、そう思うと落ち込んだ。

何か嫌われるようなことをしただろうか。あの雨の夜。

気がつく、いつもそのことばかり考えている。

「自分から話しかけてみればいいじゃん」

人のことだから、ハルナはいとも簡単にそういうけれど。

いざ、話しかけようとする、なんて声をかければいいのか、まるつきりわからなくなってしまふのだ。

そのうち。

山上さんはバイトにも顔を出さなくなってしまった。

シフト表から名前が消されていないところを見ると、辞めたわけではなさそうだけど。

なぜか来なくなってしまった。

どうしたのかな。

ケガでもしたのかな。

まさか、交通事故？

いや、でもそんな大きな出来事だったら、バイト先でもうわさになるはず。

だけど、誰も何もいわないから、たいした理由ではないのだろう。

雪菜さんや他の人に聞けばわかるかも、とも思っただけど、変に誤解をされそうで聞けない。

「彼ばかりが男じゃないんだし。元気だしなよ」

ハルナに誘われて、あたしは合コンなるものに顔を出してみた。

相手は男子校の2年生だ。

6月はじめに、その学校の文化祭に行ったハルナがセッティングしたのだ。

みんな親切で、場を盛り上げようとする明るい人ばかりだったけど……なんかギラついている気がした。

考えすぎなのかもしれないけど。

気をつかう優しさの下にも。

面白いジョークの下にも。

すべて　彼女がほしい、あわよくばセックスがしたい、という下心がみえ隠れしている気がしてならなかった。

まあ、あたしたちのほうも同じなんだけど。

なんか、サカリがついた犬のお見合いみたいにケモノじみてる、と思った。

その中の一人にあたしは気に入られてしまったらしい。

しつこく聞かれたので、メールアドレスを教えてしまったら、毎日のようにメールがきてうんざりした。

それに比べたら。

『狙われていた』はずの山上さんはずっと大人だったように思えた。考えてみたら、『狙われていた』にしては、あたしは彼にメアドもケータイの番号も教えていない。

それを教えるチャンス　山上さんの側からはさりげなく聞くチャンスは山ほどあったのに、だ。

それは、大人の余裕なんだろうか。

それとも、単にあたしに興味がないだけ？

気がつくと、山上さんの顔を、もう1週間以上見ていなくて。

だけど、バイトにいけば、いやでも山上さんのことを思い出してしまっ

やっぱり好きなのかな。

好きだから不安なのか。

気になっっているだけなのか。

いずれにしてもやり場のない気持ちを抱えたまま
た。

夏休みに入っ

14 夕立ち 1

夏休み入りしたというのに、なかなか梅雨は明けなかった。

朝のうちは晴れて暑いのに、毎日のように激しい夕立ちが来る。

今日も、午後になったとたん、いまにも雨が落ちてきそうに空はかき曇ってきた。

あと15分であがりなのに、また雨かなあ。

そんなことを思いながらバッシング（片付け）するあたしに後ろから

「アリサ〜」

と呼ぶ声がした。

振り返るとクラスメートのハルナがいた。入口のところで手を振っている。

「あゝ、来てくれたんだあ！」

あたしはメニューを持ってかけよった。

夏休みに入って。

あたしは毎日のようにバイトにいつていることになっていた。

実際かなり入っていたのだが、バイトじゃない日も祖母にはバイトといつて街をぶらついたり、早めにあがって夜まで遊んだりしていた。

バイトに対する祖母の信頼があればこそできる技だ。

4時であがる今日は、ハルナと買物の約束をしていた。

バイトで稼いだお金で自分の好きな服を買うのは自由だったから、

（「だらしない」とか「安っぽい」とか必ず一言は言われたけれど、もう慣れていたので無視すればOKだった）

夏休みに入ったあたしはおしゃれに燃えていた。

お金を貯めるという最初の目的も「おしゃれをしたい」という気持ちの後ろではかすんでしまっていた。

店長のかわりにホール全体を監督しているパートのおばさんがいるのでいちおうお客にするように、メニューを持って席に案内する。

ハルナが席につくのと入れ替わりで隣の客が立ったので、素早くレジに立つ。

会計を済ませると、お冷を持ってハルナのところへ行く。

「雨大丈夫だった？」

声をかけながら隣のテーブルの片づけをする。

「降りそうだけど、まだ降ってなかったよ。今日は4時あがりなんでしょ」

「そうそう。あとちょっと」

そんな言葉を交わしながら、隣のテーブルをセッティングしてしまう。

「なにがお勧め？」

ハルナはメニューを開いて呼び止めてきた。

「もうあがるよ？」

「いいよ。なんか甘いものが食べたい。食べながら待ってるし。アリサはどれが好き？」

「んー、いちおう、うちの店のおすすめはマンゴーフラッペなんだけど」

そこまで言っただけは、声を落してハルナにささやく。

「でも、チョコナッツサンデーのティラミスバージョンもうまいよ。本当はバナラでつくるところをティラミスでつくる裏メニュー。…こっそり作っちゃるよ」

「じゃ、それ。それにする」

こつてりスイーツ好きのハルナは案の定乗ってきた。

幸い暇な時間帯なので、こつち側のダイニングはあたしに任されている。

忙しい時間は過ぎ、おばさんもあがりがあるのでチェックが甘い。

あたしは雪菜さんにおそわったチョコナッツサンデーのティラミス版をすばやくつくとハルナの席にもっていった。

「雨、降ってきちゃったよ」

ちよつとアイスクリームのコーナーに行ってる間に、外は激しく雨が降り出してきた。

せつかくあがりなのに、タイミングの悪い……。

今、外に出たらびしょぬれになってしまうだろう。

着替えたあたしは仕方なく、ハルナの前に座った。

幸いあたしの引き継ぎは雪菜さんだったので、気兼ねはいらない。

雪菜さんは

「アリサちゃんにもチョコナッツもってこようか？ 従食伝票で」

と声をかけてきた。

本当は従食は裏で食べないといけない。表で食べる分は正規の料金を払わないといけないきまりになっている。

だけど店長もいないので雪菜さんが気を利かせてくれたのだ。

「あたしさ」

座ってほっとする間もなく、半分くらい食べ終わっているサンデーを超えるようにしてハルナが身を乗り出してきた。

なに、と聞く前に、ハルナはいたずらっぽい顔をして小さな声で言った。

「やったよ」

「うそっ」

思わず反射的に大きな声を出したあたしに、ハルナはシーッと指を立てる。

「××くんと？」

ハルナはにんまりとうなづく。

こないだの合コンの一人だ。お互い気が合って、ときどきデートしてたって聞いてた。

いつ。どこで。どんなふうにそうなったのか。

具体的なことを聞くより。

驚いたあたしはただ、ただ、絶句していた。

女子中出身のハルナをあたしは見くびっていた。

過激なことにあこがれつつも、それは口だけで、実際にはウブで奥手だと思っでいて。

踏み出すことなんかできやしないと、思いこんでいた。

そんなハルナが。

「……そう。よかったじゃん」

そっけのないがせいいっぱいだった。

「で、どうだった」

「どうって。……別に」

反射的にあたしは軽く睨んだかもしれない。

だって、その答えこそ、向こう側にいった人の典型的な答え方だったから。

それに気づいたのか、ハルナはうつすら笑って

「アリサだってもうすぐなんでしょ」

話をあたしに振ってきた。

「あゝ、あたしは……」

あたしは窓の外に目をやった。

激しい雨が、道路にしぶきをあげている。

あのときのように……。

もう1か月以上経ってしまった。

ちょうどそのとき、雪菜さんがチョコナッツサンデーを持ってきた。

雪菜さんの作ったサンデーはあたしがつくったのよりずっときれいだ。

そのきれいなホイップにロングスプーンを突き刺しながら、

「あたしは、ないかも」

あたしはできるだけそっけなく言った。

「なんで。バイトの人といい感じだったんじゃないの？」

無遠慮なハルナの声が聞こえているんじゃないかとあたしは目の端で雪菜さんをチェックした。

幸い雪菜さんは客席に背を向けてコーヒーを新しくセットしているようだった。

コーヒーマーカーのセットは雪菜さんが好きな仕事だ。

だからたぶん、大丈夫。

「最近、バイト来ないし。もしかして嫌われたのかも」

あたしはできるだけ声を落して言った。

「ええー」

「もういい。もっと他の人がいるかもしれないし」

「でもー」

「それよりさ。ハルナの話聞かせてよ……」

あたしは無理やり話を変えた。

それがせいっぱいだっただ。

次の日も朝からバイトだった。

「おはようございまーす」

あたしは裏に入ると声をあげた。返事はない。

裏には誰もいないらしい……と思ったら、スタッフ用の椅子をつなげて誰かが寝ている。

顔のあたりを店のジャンバーで覆っているから誰かはわからないけれど男性だ。

あたしは気にもとめなかった。

朝よく見られる光景だから。

深夜あけの店長や正社員がよくこつやって仮眠をとっていることがある。

朝だけ休んで、忙しいランチ時をこなしてから帰宅するのだ。

今日は制服をチェンジするか。

そう思ってビニールのついた制服をあさっていたときだ。

「嫌ってないよ」

と背後から声がした。

15 夕立ち 2

びっくりしてふりかえると、山上さんがむっくり起き上がるところだった。

そこに寝てたのはまさに彼だったのだ。

うそっ。

そのときは、山上さんが何を嫌ってないのか、頭の中でつながらず……あたしはただ山上さんの存在に、言葉ごと息をのみ込んだ。

「おはよ」

山上さんはぼさぼさになった頭を掻きながら、ぽーん、と放り投げるようにいつてよこした。

あたしがそれに返事をするまえに「てかさ」と山上さんは続ける。

「なんで嫌われてるとか思ってたわけ？」

あたしの脳は……生クリームみたいになつてたに違いない。

あまりに驚いて、その話が何から続いているのか、まだよくわからずに、ただただ山上さんの顔を見ていた。

「ねえ」

山上さんは眠そうだった目を、やや見開いた。

もしかして、山上さんに嫌われたのかもしれない、とひそかに傷ついていたのは事実だ。

でもあたしの心の中をなんで見透かされたのか。

この期におよんで、あたしはまだ、わかっていなかった。

あたしは焦って

「なんの話ですか？」

などとしらばっくれてしまった。

すると、山上さんは

「え？ あれ？ あれー？」

とあたしを指さしてキョトンとした。

あたしの心臓はバクバクどころじゃなかった。

心の中を知られるのが怖くて。

それと、最初に聞いた『嫌ってないよ』という声が、安堵になって心にひろがっていく。

なぜか、それを見破られたらいけないと思った。

「もう、なんですかあ？」

あたしは必死で芝居をする。ばれそうで怖い。綱渡りのようだ。

山上さんはあたしが心の中で綱渡りをしているとは知らずに、

「いやさ、雪菜にさ、アリサちゃんが俺に嫌われてるって、泣いてるって聞いたんだけど」

ああ。

あたしはようやく納得した。

昨日の、ハルナとの話を、雪菜さんは背中で聞いてたんだ。

「あたし、そんなこといつてないです」

ようやく思い出したのに、なぜかウソが口をついて出てしまった。

なんでそんなウソが出てきたのかわからない。

「マジかよ。くっそ、雪菜のやつー」

山上さんはあたしの言葉を信じたのか、さも悔しそうに胸のところで両手に作った拳をあわせた。

ああ、あたしは雪菜さんをウソつきにしてしまった。

罪悪感で顔に血が集まってくるのがわかる。

あたしはそれを隠すようにもう一度、山上さんに背を向けると制服

をさがすフリをした。

本当は目の前にジャストサイズはあった。

だけどなかなか見つからないふりをする。

「アリサちゃん」

一言前とは打って変わった優しい声が聞こえた。あのときの。雨の車の中でのような。

振り返っちゃいけない、気がした。

「なんですか」

そっけなく何気なく答えたかったのに、語尾がいまいち決まらない。

「私服だと大人っぽいね」

「そんなこと……」

あたしはいよいよ振り返れなくなった。

自転車をこいできたあたしは暑くて、キャミの上にきていた薄いパーカーを脱いでいた。

露出した背中に夏の太陽より強烈に山上さんの視線が注いでいる気がした。

背中と、顔が、熱い。

うまく話せない。言葉は中途半端にとぎれてしまった。

同じことを他の人にいわれたなら

『そうでしょ、そうでしょお?』

とキメてみせるくらいの天真爛漫さを装うくらいいけないのに。

途切れた言葉をごまかすように

「山上さん、ここんと顔見なかったけどどうしたんですか」

と訊いてみる。

それもトチリそうで、無意識に口の中で一度練習してからやっと声にする。

「んー。新しい店のヘルプと、大学の前期試験」

のんきな感じの山上さんの声が少しだけあたしを緊張から解き放つ。

「ヘルプ?」

あたしは振り返れないまま、訊き返す。

「うん。空港バイパス店の。なんか急に人が足りなくなったとかで。

……俺、車持つとおやん。だから店長に頼まれて」

なるほど、交通の便がここよりもよくない空港バイパス店のバイト

はほとんどみんなマイカー通勤だろう。

「もうこきつかわれるわ、こきつかわれるわ、で、それが終わったら大学の前期試験だろ」

おそろおそろ首を45度だけ回転させる……山上さんが大きく伸びをしているのが目の端にうつる。

「そうぞ。やっと昨日で試験も終わって、夏休みだしー」

なんだ。

あたしを避けてたんじゃなかったんだ。

「そうだったんですかー」

振り返ったあたしは、山上さんと目が合ってハッとした。

あまりに安心しすぎて、緊張も演技も忘れてしまったらしい。

照れそうになったあたしに、山上さんは朝の光の中でにっこりとほほ笑んだ。

「だからさ。こんど、遊びにいこつよ」

罪のないスノーピーのような笑顔で山上さんはあたしを誘った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8956d/>

うしなったもの、まもるべきもの

2010年10月13日14時39分発行